

ホロライブラバーズ

「究極の救済を行う者」

天衝

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もう一つの小説の方は自分が何を書きたいのかを分からなくなってきたので一旦ストップしてこちらを書かせてもらいます。楽しみにしていた方がいたらごめんなさい。

目次

キャラクター!	1
想定外の結果	4
『I, m a 仮面ライダー』	8
ご飯のおすそ分け	13
入学前の準備	16
幕間：暗躍する神とゲーマー	21
入学式前日	25
入学式	28
バトロワ①	31
バトロワ②	35
バトロワ③	38
バトロワ④	44
バトロワ終幕	49
進み出したDESTINY	54
二度目のRescue	59
突然のVisitor	64

キャラクリ！

今回は仮面ライダーMODを導入したホロライブラブズをプレイしていると思います！

このMODはですね先駆者の方たちが見つけてくださった仮面ライダー好きにはたまらないものになっております！

そしてこのプレイの難易度はなんと驚きの『オーディション』となっておりませう。何でわざわざ難しい難易度を選ぶのかは後で説明するので楽しみにしておいて下さい！

ということでキャラクリをしていきましょう!!!

まずは種族ですがこれは『人間』一択ですね。これは狙っている仮面ライダーになるためには欠かせない条件の一つなんですよね。

引き続いて名前は……「宝生ほうじょう 寛貴ひろぎ」にします。意味は特にありませんがなんとなくですね。何か不安ですけど大丈夫でしょう！

さあ、皆さんお待ちかねのスキルガシャですね！

さあ一つ目です！

『友情』

えっとこれは仲のいいホロメンとの好感度や友好度が非常に上がりやすくなるので普通にプレイするなら非常に当たりですね。普通にプレイするならね！今回は『オーディション』なのでそもそも関わるのが難しいのでなんとも言えないですね。まあ、まだ使える可能性がゼロではないだけマシですか。まだ一つ目だから気を落とさずに行きましょう！

さあ二つ目！

『俊敏』

おおー！これは今まで走っている先駆者の方々がよく引いているものですね！移動速度や攻撃速度が上昇する非常に使い勝手の良い当たりのスキルですね！

さあ次が泣いても笑っても最後の3つ目です！

『適合者』

……これは！今回の周回で最も狙っていたスキルです。これがなかったらもう一度キャラクリをやり直さないと行けないところでしたので！ちなみにどういう効果かと説明すると、簡易的に言うところゲーマードライバーが使用可能になると言うことですね。いや、このためにわざわざ種族を人間にしておいて良かったです。ゲーマードライバーは人間出ないと使用できないと言う条件がありましたので！

そしてなんで難易度を『オーディション』にしたかといいますとこれは簡単ですね。シンプルに最後のスキルで出た『適合者』と言うスキルが難易度が難しいほど出やすいと言われてますので（自分調べなので本当かは知らない）

さあ、そして肝心の見た目ですがこれはランダムで、いいですかね。背は高めの黒髪ですね。そして前髪は左側に流されています。あとは、特に目立ったところはなさそうですね。

今回のキャラクリはここで終わろうと思います！

あとは少しムービーを観てから終わりますのでもう少しお付き合い下さい。

「ここならきつと拾ってくれる人がいる。」

そうしてたどり着いたのは聖都大学付属病院であった。

「ごめんね。いつかきつとあなたのことを一緒に居たいと思ってくれる人がいるからね。」

そう言った先にいるのは布団に包まっている小学生くらいの少年だった。

「さようなら、寛貴。あなたをここに置いていく私達を許さなくていいから。」

そうして立ち去ったあとに残ったのは側面に寛貴と書かれたダンボールとその中にいる少年だけだった。

そうして置いていかれて何時間が経ったのか、雨が降り出した。

するとどこからともなく足音が聞こえてくる。

「これは、こんな雨の中小さな少年がこんなところに捨てられているなんて。」

「しようがない！この私がひとまず連れて帰ろうではないか！」

そう言うと、男性はダンボールごと少年を抱えて何処かに連れて帰っていった。

では、ひとまず終わります！ありがとうございました〜！

想定外の結果

今回から実況を始めて行くんですが、まずはOP確認をしようと思います！

「ようやく、目が覚めましたか？」

そうして聞いてくるのは顔立ちの整った男性だった。

「君は段ボールに入れられて置かれていたけれどなにか理由があるのかい？」

そう聞かれそんなことをされた理由を考えようとしたが思い出さうとすると頭に痛みが走った。

「ぐっ……」

頭が痛くて頭を押さえているとその男性はほかのことを提案をしてくる。

「君はゲームは好きかい？」

「え？好きだけど……」

「ほかのことをしていれば気が紛れると思ってね。幸いにも、ここはゲーム会社だからね。」

「あなたは一体誰なんだ？」

「わたしかい？わたしは檀黎斗だ！」

そうしてなんだかんだでゲームプレイ中……

「ここを、こうして……」

「ここが、こうなって……」

「これで、こうだ！」

『GAMECLEAR』!!

「よっしゃ、クリア!」

ゲームを勧められてからおおよそ3時間ほどでクリアをすると
黎斗さんは信じられないといった顔でこちらを見ていた。

「信じられない、このゲームはこんなに速くクリアできるはずが……」

「お兄ちゃんが考えたゲームよりは簡単だったな!」

「あのときの、いやそんなはずはない」

「あの、どうかした?」

「いや、なんでもない! そうだ、お菓子があるんだ。向こうで食べよう
ではないか。」

「この少年のゲームセンスは天才ゲーマーMと同等、いやそれ以上、そ
んな人間が存在するなんて。」

「そういえば、君はいくつなんだ?」

「俺?俺は12才だ。」

「そうか、ありがとう。」

はい、ということとで神こと檀黎斗さんが登場ですね。これは結構嬉
しい方で最初の方は逆らいさえしなければサポートキヤラ的な存在
でゲームクリアへのお手伝いをしてくれます。それにしても、寛貴く
んはゲームセンスが凄いですね。あの黎斗が作ったゲームをたった
3時間ほどでクリアしてしまうなんて。

ということとで、opはこれ以上は無さそうなのでスキップ!

「うーん……」

窓から入った日光で目を覚ますとベッドから起き上がった。

「昨日、ちよつとゲームしすぎたかな。」

そうして、洗面所まで歩いて行くと身だしなみを整える。

「えーつと、今日は……」

そう言つて、予定のかいてあるであろう携帯を開こうとすると何十件もの着信履歴が届いていた。

「あつ、やっぱ、急がねえと」

えーつと、寛貴くん？ 始まったばつかのに用事に遅刻するつて、何をしてるんですか？ あんまり、そういうことはしない方がいいですよ？

「この私を待たせるとは、いい度胸だな。寛貴！」

大変ご立腹な様子の黎斗はこちらに向かって大きな声で怒鳴ってくる。

「まあまあ、落ち着けよ。そんなに怒つてもいいことないぜ？ もつと、いろいろと楽しもうぜ！ なあ、寛貴。」

そして、それをもう一人の人物がなだめながらこちらに向かって微笑んでくる。

「パラド…」

「そんなことより渡すもんがあるんだろ？ 社長さん。」

「そうだった。今度の入学のお祝いとしてこれを渡そうとしてたんだ。」

そうして取り出したのは黒いアタッシュケースだった。

そのなかには一つのベルトとガシヤットが入っていた。

「へえ、いいなこれ！ 俺にはないのか？」

「君にはまた今度ほかのものがあるから我慢してなさい。」

羨ましそうに黎斗を見ながらパラドはそう言ったが軽く流されてしまっていた。

「これを、俺に？」

「君なら使いこなせるはずだ。ぜひ有効に利用してくれ。」

「話はもう終わりか？ じゃあ寛貴、ゲームしようぜ！」

「お、いいぜ！ ありがとうな、黎斗！」

感謝の言葉を黎斗へとかけるとそのままパラドとゲームを始めていった。

ライダーmodをいれたかいはありましたね。こんな最初から二人も会えるなんて、これから苦しいことがあるから最初だけの運営の優しさかな？ありがとうございます！！

ということでは終わります！

See you Next Game

『I, m a 仮面ライダー』

さあ、前はガシヤットとベルトをもらいましたね！これで最低限戦う為の準備ができました！

ということ、続きをプレイしていきましょう！

「これがガシヤットか。なんというか不思議な形だな。」

ベルトとガシヤットをもらった帰り道、手に持ちながらそんな感想を呟く。

そうして、少し歩いていると前方から二人組の少女が歩いてきていた。

「でさ、あのゲームがね〜」

「あれね、面白いよね。」

前から歩いてくる少女達を避けようと道の脇の方へと寄ろうとするときに手を滑らせてガシヤットを落としてしまった。

「あつ…」

「ん？これって—」

「これ、幻夢コーポレーションの次回作じゃん！なんで持ってるの？」

「んーと、もらった！」

そんなことを言っているうちに紫髪の少女がゲームを起動しようとしていた。

「ここを押せるんだ！」

『マイティアクションX』

「へー、こんなふうになるんだ。」

頭に白い動物の耳が生えている少女は少し下がって観察している。

「うっ！」

ゲームを起動した少女は身体にノイズが走り苦しんでいる。

「は？大丈夫?!」

もう一人の少女が近くに駆け寄って心配をしている。

「そういえば——」

「ああ、そうだ。このガシヤットは変身をするために作られているから他の人には渡さないようにね。」

パラドとゲームをしていると不意に後ろからそんなことを言ってきた。

「なんで？」

「特に抗体もないのに使うと『ゲーム病』という病気に感染してしまう。感染するとバクスターユニオンというものに感染者が取り込まれてしまう。その後、しばらくするか、無理矢理分離させると感染者は次第に透明になって消滅してしまう。分離したバクスターを倒さなければそのまま文字通り消滅だ。」

「で？その分離ってのはどうやってするの？」

「レベル1のみ可能だ。」

「わかった。一応覚えておく。」

「これが黎斗の言っていたゲーム病……」

そう呟くと白い髪の獣人の子はこつちに掴みかかってきた。

「何か知ってるの?!どうにかしてよ?!」

「わかった。少し下がってて。」

そう言うのとベルトを腰に当てる。そうして落ちていたガシヤットを拾い上げると起動した。

『マイティアクションX』

「変身!」

『ガシヤット!レッツゲーム!メツチャゲーム!ムツチャゲーム!』

ワツチャネーム! I, m a 仮面ライダー』

「わわわ!なんだコレ!」

歌のような音声が流れたかと思うと現れたのは二頭身のマスコットのような姿だった。

「まあ、でも黎斗の言うとおりならこれであの子を救えるはず!行くぜ!」

おお!遂に変身きた!このためにMOD入れたまでであるので最高

ですね！というか名前こそ出てないけれど二人組ってトワ様とししろんですよね！前回に引き続きこのゲームは本当に鬼畜なのか疑いますよね！まあこれから厳しくなるとは思いますが。

「さあ、ノーコンティニューでクリアしてやるぜ！」

バクスターユニオンへと突っ込んでいくと殴りかかろうと手のようなもの振りかぶっていた。

それを避けるために空中へと飛ぶと足元にブロックが生成された。

「このゲームはこういうものか。ならー」

バクスターユニオンから離れて少し離れたところにあるブロックを破壊すると中からアイテムが出てきた。

「よっしゃ！アイテムゲット！」

『マッスル化！』

「おりゃー！」

そうして振りかぶったパンチで攻撃すると相手は吹っ飛んだ。

GAME CLEAR

「あれ？終わり？黎斗の話的に続きがあると思ったんだけど。」

そんなことを思っていると紫髪の少女からオレンジのウニョウニョのようなものが出てきた。

「お前は誰だ？」

「私はソルティ。貴様のようなしよっぱいやつは私が倒してやる！」

そうしてソルティと名乗ったバクスターが手を振るうとたくさんのバクスターウイルスが現れた。

「うーわ、いっぱいだなあ！大変身！」

『レベルアップ！マイティジャンプ！マイティキック！マイティマイティアクション X！』

『ガシャコンブレイカー』

「どンドン倒していくぜ！」

さっきのマッスル化の効果が続いているのか一撃当たると敵の戦

闘員は吹き飛んでいく。

前、後ろ、左右と周りに沢山いるおかげで適当に振ってもどんどんあたっていく。

「さあ、あとはお前だけだ！」

「くそ、この私が出ることになるなんて。」

『ジャキーン』

「よいしょっと！」

ガシヤコンブレイカーをハンマーモードからブレードモードに変形させ、ソルテイに斬りかかるが電撃で反撃をされる。

「うわあ、初めて攻撃喰らったけどこんなもんか。」

「じゃあ、終わりにしようぜ。」

そう言うのとベルトからガシヤットを抜きキメワザスロットホルダーに挿した。

『キメワザ！マイテイクリティカルストライク！』

少し離れたところから助走をつけると勢いよくライダーキックを連続で放ち止めの一撃で上に蹴り上げた。

「よし、クリア！」

『ガシユーン』

ガシヤットを抜き二人の少女のもとへと向かった。

「大丈夫？」

「はい。あの、ごめんなさい。勝手に起動しなかったらこんなことにならなかったのに。」

「いいよ、次から気をつけてね。あとは……そうだ！名前教えてよ、俺は宝生寛貴って言うんだ。」

「へ？コホン、こんやつぴー、常闇トワ様です！よろしくね！」

「ららーいおん、獅白ぼたんです。よろしく〜」

ふたりとも元気な挨拶を返してくれたので気持ちは沈んでないよ
うで良かった。

「じゃあ、またどこかで！」

そう言って去ろうとするのとトワに腕を引っ張られて止められる。

「ちよちよ、携帯番号教えて！」

「あたしも欲しいなー。」

そう言われ携帯を出されるともう何も言えない。

「わかった、はい。」

そうして携帯を二人に手渡す。

「ありがとう！返すね！」

「じゃあ、今度こそ帰らせてもらおうよ。」

携帯電話を追加して満足したのか次は引き止められることはなかった。

「ばいばーい」

今回は変身もできましたしホロメンの二人トワ様とししろんと、知り合うことができたので良かったです。ではまた次回！

See you Next Game

ご飯のおすそ分け

前はスキルの確認もせずに戦闘をしちやいましたね。少し気を抜いていましたが今これからは『オーディション』ということを入れて慎重に行動していこうと思います！

ということで、スキルの確認していきましょー！

『友情』 『俊敏』 『適合者』

この3つは最初のキャラクリをしたときのまんまなのでこれらは大丈夫ですね。

他のスキルは……

『一騎当千』 『???』 の2つです。なんか不思議なやつがあつて怖いのだが。

とりあえず説明すると

『一騎当千』 1対多数の場合、身体能力がその戦闘中2倍になる。

といったバトロワにとっかしたスキルです。これは凄くバトロワで勝ち進むには重宝したいスキルなのでとてもありがたい！

さてもう一つなんですが説明のテキストが黒く潰れちゃってるので読めませんね。

まあ、これは良くも悪くもゲームなので一応はなんとかなるでしょう！
これでスキルも確認したことですしゲームを進めましょー！

家に帰り椅子に座り今日貰ったガシヤットとベルトを机の上に置く。

「これを俺に渡して何がしたいんだ？ 黎斗のやつ」

そんなことをガシヤットを眺めながら考えるが何も思いつかない。

「アアア！ 考えるのやーめた、ゲームしよつと！」

考えるのを早々にやめてテレビに備え付けられているゲームを起動すると手慣れた様子でプレイを始めた。

「よいしよつと。考えるのは今度でいいや。」

「おおい、寛貴くん?!そんなお気楽なこと言ってるで大丈夫なのか?あの人がぞ!檀黎斗だぞ!何も考えてないわけがないに決まってるじゃないですか!!」

「とか言っても、しょうがないですよ。少なくとも3年は関わってきたんですから。しかもほとんど親同然の人ですしね。」

「よっしゃ、ノーダメクリア!」

「そうしてクリアしたときには外はいつの間にか明るくなっていった。」

「あー、またやっちゃた。まあ、いいや、寝よう。」

「そうして寝ようとするときに音が家の中に鳴り響く。」

ピンポーン

「起きてるー?」

「インターホンについてあるカメラを覗くとそこには大きな黒い耳が見えた。」

「何のよう?こんな朝から。」

「さっき声が聞こえてきたよ!また寝ずにゲームしてたんでしょ!」

「そうして怒ったようにこちらを睨みつけてくる彼女の名前は大神ミオ。隣に住んでいても聞こえないはずの音量の声にいつも反応をする獣人だ。」

「はい、これ食べてね。また何も食べてないんでしょ。」

「そうして差し出して来たのは色とりどりのおかずがはいったタツパーだった。」

「また、持ってきてくれたのか?」

「そうだよ。だってウチはお姉さんなんだから。寛貴のことだったら何でもしてあげないと。」

「そういったミオの顔はとても笑顔だった。」

「まあ、ありがたく貰っとくね。後で食べて返しに行くから。」

「うん。待ってるね。」

「そうして、タツパーを受け取り後で返すことを伝えると、笑顔で帰っていった。」

「じゃあとりあえず冷蔵庫に入れてっと。」

「貰ったタツパーを冷蔵庫に入れると寛貴はベットに歩いて向かつ

た。

「おやすみ〜」

誰かに言うわけでもなくそういうと布団を被って眠ってしまった。

《大神ミオと仲良くなった》

ミオしゃ！ミオしゃが出ましたよ！しかもなんか好感度が高めの状態でということでご飯も分けてもらえました。これはとてもありがたいですね。まあ、なんか寝ちやつたんですけど。ということでご帰ろうと思います。

See you Next Game

入学前の準備

前はミオしゃがご飯を持ってきてくれたのとスキルの確認を
ただけでしたので今回はしっかりと入学前の準備をしていきましょ
う！

寝たのは朝だったので目が覚めると太陽はすでに登りきって外は
凄く明るかった。

「そういえばご飯を持ってきてくれてたな。」

ミオが持ってきてくれたご飯を取りに冷蔵庫へと向かい取り出し
た。

「…美味し」

貰ったご飯を食べるととてもおいしかった。

「後で返しに行こう。」

そう言っつて全部、残さず食べると水につけた。

「さーて、どうしようかな。」

街へ出かける

身体を鍛える

読書をする

身体を休める

ここはアイテムなどの装備品を整えていきましょう！
ということ街へ出かけましょう！

出かけるために目に入った適当な服を着て、必要な財布や携帯を身
に付けると家を出た。

「さあ、どこに行こう。」

雑貨屋さんに行く

本屋さんに行く

武器屋さんに行く

ここは一旦本屋さんに行きましょうか。欲しいと思っっているもの

がなかったら他の2つのところに行きますが。

「本屋さんに行ってみるか」

行くところを決めて本屋さんに向かおうとすると天気が少し危ない気がした。

天気が悪そうだ、外出をやめるか？

多分大丈夫。雨は降らないはずだ。

ここでも選択肢ですか？上を選ぶと家での行動とスキルポイントがもらえて、下を選ぶと恐らくホロメンとのイベントがおきますね。

こんなの下一択ですね！

「そういえば……」

(今日の天気は一日晴れです。)

「って言ってた気がするな。」

そういうと傘も何も持たずに出かけた。

ピロン

『4/2本日の天気は雨です。外出する際には傘を持ち歩くことをお勧めします。』

スマホにそんな通知が来ていたことも知らずに。

移動中

「よーし、到着！」

家を出てから20分程のところにある本屋さんに着すると中には行っていった。

「さーて、どんな本があるかな。」

そうして店内を見て回ると面白そうな本を見つけた。

「罫設置の作り方？なんか面白そうだな。」

よっしゃ！お目当ての本を一発で見つけることができました。寛貴くんは変身ができれば負けませんが逆をいうと変身できなかった

ら今の状態じゃ危ないですよね。

というわけでこの罨設置を使えるようになるスキルが欲しかったんですよ！これがあれば時間稼ぎをすることもできますしね、空を飛ばれない限り。

「おっ…これは……」

そうして手に取ったのは表紙が黒く塗りつぶされ開くことのできない本だった。

「何だこれ？…これも買つとくか。」

レジへと持つていくと店員さんに驚かれた。

「これを買うんですか？ 私達も内容のわからないのに。」

「はい、大丈夫です。」

「……方が何かあつても返品を受けませんからね。」

大丈夫というと、念を押すように言われそして店員さんの顔は少し明るかった。

(やっと不安なものが売れた！)

少し悪寒が走ったが、

そうして2冊の本を買い店を出ると外に出ると土砂降りの雨が降っていた。

「嘘だろ！ 天気予報は晴れて言つて…たの…に」

スマホを見るとそこには通知が届いていた。

『4/2本日の天気は雨です。外出する際には傘を持ち歩くことをお勧めします。』

「ハァー、雨宿りするかあ。」

店の外についているベンチに座るとさつき買ったばかりの本を読み始めた。

数時間後

「雨、止まねえ！」

そう、買った本を読み雨が止むのを待っていたが一向に雨が止む気配がしないのだ。

「どうする、濡れながら帰るか？ 嫌でも、本が濡れるしな！」

そうして悩んでいると後ろから声を掛けられた。

「あの〜どうかしましたか？」

後ろを振り向くとそこにはいつも見ていた黒い耳ではなく白い耳がぴよこんと動いていた。

「お困りでしたら、傘に入りますか？」

その白い耳の少女は俺に救いの手を差し伸べてくれた。

「へ？いいのか？」

「構いませんよ。困ってるときはお互い様ってよく言うじゃないですか。」

「じゃあ、お言葉に甘えておねがいます。」

そうしてその少女の傘に入れてもらうことにした。

「どうして、あそこで座ってたんですか？」

「今日は雨振らないと思って傘を持ってなかったんだ。」

「え！でも今日の天気予報は雨って言ってましたよ。」

「やつぱ、そうなのか。じゃあ俺が見たと思ってた天気予報は、何だったんだ？」

「ちなみにその見たっていう天気はどうだったんですか？」

少し笑いそうになりながら聞いてくる。

「一日晴れって。」

「それ、昨日の天気ですよ！」

遂に笑うことを隠そうともせずに笑ってきた。

「何だよ、笑わなくなっちゃっていいだろ。」

「いや、でもだって、ふふっ。一日ズレた天気予報見てるなんて、あははっ！」

そんな話をしているうちに天気はいつの間にか良くなっていった。

「あっ！晴れましたね！じゃあ、白上はごっちなので、また会いましょうー！」

「あっ、ちょっとまってー！」

「はい？なんですか？」

「名前、名前を教えてください。俺は宝生寛貴。君は？」

その少女は顔をニコツと笑うと名前を教えてくださいました。

「私は白上フブキっていいいます。よろしくお願いしますね！」

そういうと手を振り去っていた。

「またね！」

「ああ、またな。」

《白上フブキと知り合った。》

ちよつと予想外なところから来ましたね。この間知り合ったトワ様かしらるかとおもいましたが白上フブキこと

フブちゃんでしたね。それにしても相合い傘なんて、羨ましいですね。

まあ、今回は目的の本とフブちゃん知り合うことができたので良かったです。

ということで、今回はここで終わろうと思います。

See you Next Game

幕間：暗躍する神とゲーマー

「どうして、ドライバーとガシャットをあいつに渡したんだ？データ収集なら先に渡した他の奴等で十分だっただろ？」

パラドはパソコンに向かってキーボードを使って何かを打ち込んでいる黎斗に問いかける。

「なぜ彼に渡したかだつて？そんなのは簡単なことさ。彼はとても天才的な才能を持っている。」

そういうと同時に、力強くエンターキーを叩きつけ椅子から立ち上がる。

「そんな彼のデータが集まれば私の完璧な未だ誰も見たことがないゲームを作ることが可能だからさ！」

そう言い放つと何処か不敵な笑みを浮かべた。

「そう言えば、お前が渡した日に寛貴が変身したんだつてな。その時ちようどガシャットを見た何処かの会社？かわかんないが何か企んでいたぞ。」

パラドは、この間寛貴がガシャットを貰った後何か起こらないかつけていた。その時ちようど寛貴が変身したと同時くらいに何か怪しい人物が数名少し離れたところからカメラを取り出し録画していたという。

「なん…だ…と！そんなことは許されない！ガシャットは私の才能の結晶、ガシャットを作り出していいのは私だけだ！私に許可なくして量産だなんて許されるはずがない！」

そして、案の定ガシャットを自分以外の誰かに作り出されるのをごとん嫌う黎斗がそんなことを許すはずがなかった。

「ならば、あいつらをぶつ潰すんだろ。俺にもやらせてくれよ。」

ガシャットを貸せと言いたげな顔で手を差し出すパラドに黎斗は少し考える素振りを見せる。

「…いいだろう。君にも肩慣らしが必要だろう。」

そういうと、黒いアタッシュケースから青をベースとした寛貴に与

えたものとは全く形の違うガシヤットを渡した。

「おお、やったあ！」

パラドはそれを小さい子が新しいおもちゃを与えられたかのようにふるふる。

「では、私に許可なくガシヤットを生み出そうとする者たちを肅清していくぞ。」

「ああ、行こう。」

そう言って、二人ともが会社を後にした。

ドツカーン！

「うわあー！」「キヤアー！」「なんの音だ！」

会社の入り口が大きな音を立てて崩壊していくと同時に奥から2つの人型の影が煙のなかから出てくる。

「なんで、正面から突っ込んだんだ？何かしらの警備があるって言ったのお前だろ？ゲナム。」

赤を基調とした姿をしている方がゲナムと呼ばれた紫色を基調とした姿をしている方に尋ねる。

「どうせ、全員記憶出来はしない。そんなことよりもさっさとかたをつけるほうがさきだ。」

そんな話をしながら歩いて倒れて動けない男性のところへと歩いていく。

「お前たちの社長は何処だ？返答次第では生かしてやろう。」

首へブレードモードに変形したガシヤコンブレイカーを突き付けながらそう問いかける。

「このビルが一番上です！一番上にある社長室にいます！」
顔を青ざめさせながら男性はそう答える。

「行き方は？」

「そのエレベーターです！」

指で指し示しながら急いで答える男性。

「そうか、助かったよ。」

その答えを聞くとガシャコンブレイカーを首から離しゲンムとパ
ラドはエレベーターへと向かっていく。

「良かったのか？あいつらを放っておいて。情報が漏れたらどうすん
だ？」

「その時はその時さ。彼らには命を持って償って貰う。」

そんな話をしていると屋上に付いた事を知らず音があった。それ
を聞き扉が開くとエレベーターから降りた。

ドカンッ!!!

社長室にたどり着くと扉を蹴り飛ばす音が社長室に鳴り響いた。

「貴様かぁ、ガシャットを私に許可なく作成しようとしてるのは！」

社長室に入るや否や飛びかかるゲンムを襲うのは見えない壁だっ
た。

「ふふふっ！悪いね、あんたがそこまで怒るとは思わなかったよ。な、
ゲンムの社長さん！」

「あれは、入口に合ったものより数倍は硬そうだ。」

そう言うと、パラドは腰についているホルダーからガシャットを取
り出しダイヤルを2回回した。

『PERFECT PUZZLE!』『What's the next
stage?』

「大変身」

『DUAL UP!』『Get the glory in the
chain! PERFECT PUZZLE!』

「心が踊るな！」

「さてと、あのバリアがあるとどうしようもないから一発で終わらせ
てやる。」

「これにしよう！」

『kimewaza dual-gashat パーフェクトクリ
ティカルコンボ!』

『マッスル化』×3

たくさんのエナジーアイテムを片手で操り3つのマッスル化を攻撃力を上昇させた。

そうして放った攻撃を受けてゲムムの攻撃を防ぐ程のバリアも砕け散ってしまった。

「え、ヤバー！にげなきやー！」

そこで初めて今までこちらを舐め腐っていた顔に焦りが出る。

「逃がすと思うなー！」

「いや、逃げさせて貰うね。」

そうして、懐から何かを取り出したかと思えばそれを地面に叩きつけた。

「ばいばーい！べーっだー！」

煙の中こちらを睨み付けながら何処かへ去っていった。

「しらけるぜ。」

「あゝあゝあゝ、にげられたー！」

膝について本気で悔しがっているゲムムの肩を叩いたパラドは話しかける。

「早く俺らも逃げようぜ、警察が来る前に。」

「くそ、せめてデータだけでも。」

そう言つてパソコンを立ち上げるとものの数分でデータを抜いたのかパソコンの電源を落とした。

「帰るぞー！」

「ああ。」

See you Next Game

入学式前日

『さあ、明日は入学式だ。どうする。』

この前買った本を読み返す。

トレーニングをする。

少し外を歩く。

特に何もしない。

突然選択肢から始まりましたが問題はないです。

さてと、ここはどうしましょうか。入学式前日ですし息抜きとして少し外を歩いてもらいましょうか。

ということ、少し外を歩いてもらいます。

「ちよつと外を歩いてみるか。今日は雲一つない天気だしな。」

そう言つて財布と携帯そして万が一のときのためにガシヤットとベルトを持つて家から出た。

歩きだして少しすると黒い生き物が困ったようにオロオロとしているのを見つけた。

「大丈夫か？」

困っている感じだったのでそう尋ねると少し身体をビクツとさせたがこちらを向いて何かを伝えようとしている。

「誰かとはぐれたのか？」

恐らく誰かのペットと判断をして尋ねるとすごい勢いで頷く。

「じゃあ、一緒に探すかー！」

そう言つと、黒い生き物に手を伸ばして肩に乗せる。

「見つからないな。どんな感じなんだ、お前のはぐれたやつは？」

肩に乗せているそいつに聞くとどうにか表そうとしていたが失敗に終わってしまったようだ。

「あつ！見つけた！」

そんなことをしていると後ろから唐突に声が聞こえてきた。

「お？お前の飼い主か、あれ？」

はぐれたのかと尋ねたときと同じくらいか、それ以上の勢いでうなずいた。

「お前、ビビを離せー！」

黒い生き物に飼い主かどうか尋ねて顔を声の発生源を向くとどこからか取り出した槍を振りかぶっていた。

「うえっ！まじかよ。」

『マイティアクションX』

「大変身！」

変身してトワの攻撃を受け止めるが止まる様子はなく、そのまま次の攻撃の準備を始めていた。

「ちよつとまってくれ！」

そう言うと、そこで初めて動作を止め俺の顔を見た。

「なに？」

不満気な顔でこちらを見ている。

『ガシユーン』

「こいつの飼い主なんだろ。はい、どうぞ。」

そうして肩に乗せていた黒い生き物を手に持って渡しに行く。

「……ありがと。」

何も聞かずに攻撃をした手前気まずいのか少しためらったあとにお礼を言っているのととてもいい子なんだろう。

「お前も飼い主見つかってよかったな！」

ビビと呼ばれた黒い生き物の頭を撫でてやると少し嬉しそうに尻尾を振っていた。

「……」

それをトワは無言で眺めてボソツと呟いた。

「トワが撫でるときはそんな顔しないのに。」

「どうかした？」

「いや、なんでもない。じゃあ、トワたちは帰るから。ビビを見つけて

くれてありがとう。」

「なんか困ってたしいいよ。今度ははぐれないようにな。」

「ばいばーい！」

「ああ、またな。」

そうして別れて帰路について家の前につくとダンボールが扉の前においてあった。

「なんだこれ？」

家の中に持ち入りダンボールを開けると中に入っていたのはホロライブ学園の制服だった。

「おお、これがあの学校の制服か！なんか特別な服って感じがする。」

とても嬉しそうに制服を確認していたためかポケットに入ったなにかに気づけなかった。

『發送元 ゲンムコーポレーション』

今回は少し出掛けるだけだったんですがトワ様と会えたんですよかったですね。そして制服もしっかり届きましたし不安要素は一応は解消ですね。ではまた次回！

See you Next Game

入学式

ついに入学式ですね！今まで会えたホロメンに追加で関わる事ができるかも？

ということ自分の運を信じて進めましょう！

今日から学校に入学だ。下手なことはしないように気をつけておこう。

「さてと準備するか。」

顔を洗い朝食を食べ昨日届いた制服を着るとインターホンが家に響く。

「寛貴くん、起きてるー?」

「起きてるけど、何?」

そう答えながらとりあえず家にあげるとこちらを見て少し驚いた顔をしていた。

「どうしたの?その制服って…」

「ああ、そういえばいつてなかった。俺今日からホロライブ学園に行くんだ。」

ホロライブ学園に行くということ伝えると笑みを浮かべながらこんな提案をしてきた。

「ウチもそこに行ってるんだ!一緒に行かない?」

「え、いや…」

「だめ?」

上目遣いでそんなことを言われたら断れるはずもなく…

「わかったよ。一緒に行くか。」

「やったー!」

嬉しそうな声を上げているミオに苦笑いをしながら昨日のうちに準備していたカバンを手を取った。

「よし、じゃあ行こっか。」

「…そうだな。」

2人で家を出て学園へと向かった。

「ここがホロライブ学園……」

目の前にはとても大きな建物がいくつかあった。

その建物の前には多くの人がたくさん集まっていた。

「すごいっばいの人だね〜」

「そうだな。」

周りを見渡しながら歩いていると後ろから声を掛けられた。

「ねえ、君たちこんなところでどうしたの？急がないともうすぐ入学式がはじまるよ？」

そこには腰に二本の刀を差した鬼の少女が立っていた。

「えっ、ホントですか？」

焦ったように問いかけるミオ。

「うん、あと5分くらいで始まると思うけど……」

「ありがとうございますー！」

お礼を言うとミオは俺の手を引いて走り出した。

「えっ、ちよっー」

しかもとんでもない速さで。

そのおかげでなんとか入学式に間に合った俺たちは空いている席に座った。

『只今より、ホロライブ学園入学式を始めさせていただきます。』

司会の声とともに入学式が始まった。

そしてそれから10分ほどで今日の予定、学校の方針、取り組みなどの説明が始まった。

「――！」

なんとなくあたりを見渡していると見知った顔を見つけてしまった。

『続いてはゲームコーポレーション社長檀黎斗さん。お願いします。』

「はい。」

そこからは驚き過ぎて黎斗が何を言っているかなどは一切頭には入らなかった。

え、いやなんているんですか。あなた今日も普通に会社でゲーム作ってなさいよ。こんなところで油を売ってないで働きなさい。

「…はあ、疲れた。」

椅子にもたれかかりながら呟く。

「まあまあ、そんなことを言わずにこれからだよ」

隣の座席に座っていたミオが励ますように言ってくる。

楽しそうなミオの顔を見て少し気持ちが楽になった。

そんな他愛のない話をしていると突然放送の音が鳴り響く。

『只今より10分後バトルロワイヤルを開始します。準備の必要がある生徒は今すぐ準備をしてください。』

ということなので今回はきりがいいのでここで終わります。ではまた次回もお願いします！

See you Next Game

バトロワ①

前はちようどバトロワが始まるところで終わったので続きからはじめましょう！

チャイムが鳴り終わるとミオが話しかけてくる。

「寛貴くん、今のって…」

「…ああ、そうだな。さっき入学式で言ってたやつだな。」

そう言いながら周りを見るともう既に教室から出て行っている奴も何人かいる。

「…ああー、じゃあお互い頑張ろうぜ。」

「うん！寛貴くんも頑張つてね！」

俺は自分の席に座りもう一度周りを見回すと生徒は移動をし教室に残っているのは俺だけだった。

「さてと、どうしようかな。」

「——おい！何してるんだ！」

これからのことを考えているといつの間にか眼前に大きな2つの角が生えている少女が立っていた。

「…お前は、誰だ？」

「吾輩の名前はラプラス・ダークネスだ！」

「うん、誰だ。」

「嘘だろ！秘密結社h o l o x って知らないか?！」

「知ってるわけないだろう。ていうか秘密結社って言ってるのに俺に言つてよかったのか？」

「あつ、やべつ。知らなかったのかよ。くそ。」

何か急に悔しがり始めたぞコイツ。大丈夫か？

「まあいい。とりあえず吾輩についてこい。」

「何だよ。」

「いいから、ついてこいって！」

そう言うトラプラスは俺の腕を掴んで走り出した。

「うわあー！」

俺が驚くことなどお構いなしにラプラスはどんどんとひっぱっていく。引つ張られながらもたどり着いたのは屋上だった。

そこにいたのは仮面をつけている少女、刀を背負っている少女、試験管を身に着けた少女がいた。

「あれ？幹部は？」

「ルイ姉は、「私は先生だから参加できないから」っていったよ。」

「そうか。ということだ、吾輩たちと手を組まないか？」

「は？いや、何の話だよ。そんなことを言うために俺を連れてきたのか？」

「えっと、いや味方は多いほうがいいかなって思ってた。」

「ふーん、じゃあ俺はこれで。」

「えっ、ちよっ！」

そう言っつて屋上から出ようとすると思つたような声を出した。

「ちよつと待つでござる。ラプ殿の話を適当に流して何処に行こうとしてるでござるか？」

「何処つてバトロワだろ？1位になるためには全員倒さねえとじゃん。」

「じゃあ、風真とここで戦ってもらうでござる！」

そう言うとうちの自分を風真といった少女は刀を抜き踏み込んでくる。

「覚悟ー！」

上段から思い切り振り下ろしてくる刀をなんとか避け距離を取る。

残っているラプラスたちの方を見ると目をそらして声を出さないように頑張れと唇を動かした。

「……まじかよ。」

そうこうしている間にも風真は一度離れた距離を詰めて刀を何度も振ってくる。

「ああ、もうー！」

『マイティアクションX』

「大変身！」

『ガシヤコンブレイカー!』

変身をして何とか武器で、受け止めるがそんなことはお構いなしに踊るように刀を振るい続ける。

「しつこいなあ。」

そう言うのと近くにあったブロックを一つ壊す。

『混乱』

「おっ!ラッキー、これでもくらえ!」

さつき見つけたエナジーアイテムを風真へと投げつける。

「頭が……!」

アイテムの効果で混乱した風真の頭上にはぐるぐるとしたエフェクトが表れる。

「あのベルト、あのとき会社に乗り込んできた!」

そうして思考していると横から話しかけられる。

「ラブちゃん?いろはちゃん倒されちゃうけど大丈夫なの?」

その言葉で気づいたときには侍はピンチになっていた。

「でも、あれは無理矢理、侍が引き止めた結果じゃん。」

そう、あれは侍が挑んだ勝負だから—

「バトロワなのに何言ってるの?助けないの?」

その言葉で思い出した、これがバトロワであることを。

「これで、とどめだ!」

『キメワザ!マイテイクリティカルストライク』

風真に近づいて蹴りを放とうとしたときに俺と風真の間に試験管が割り込み蹴りが当たった瞬間に爆発が起こった。

「うわあ!」

「きゃあ!」

「いろはちゃん、一回ここは退いとう。」

ピンクの髪の毛の獣人は風真を背負って煙とともに見えなくなつた。

そうして煙が晴れた頃にラプラスたちがいた方を見ると一枚の紙がおいてあった。

「今回は悪かった。次はもうちよつと、違う誘い方をするから手伝ってくれると嬉しい。」

ということ、今回は特に誰も撃破できませんでした。が一位になることは諦めないんで頑張っていきましょう！それではばいばい！

See you Next Game

バトロワ②

「これからどうしようかな」

屋上から学校全体を見回しながらつぶやいていると離れたところから爆発が起こった。

「んー、あっちに行ってみるか」

そうして、爆発が起こった場所へと足を向ける。

「これで終わりね」

「…ッ！」

終わりと言った少女は手を倒れている相手にかざして魔法を放とうとする。

「バイバイー！」

とてもニヤニヤとした顔で言い放つと同時に手で魔法を放った。

「うわあ、えげつな」

その光景を少し離れたところから歩きながら見ているとその言葉に気づいたのかこちらに身体をむける。

「なにしにきたの？」

そう尋ねてくるが答えは一つしかない。

「もちろん、お前を倒しに」

質問に答えると額に青筋を立ててとてもわかりやすく怒っているのが見えた。

「は？シオンのこと舐めすぎでしょ、今の見てなかったの？」

雷を纏いながら普通じゃないスピードでこちらへ突っ込んでくる。

『ガシャコンブレイカー』

『シャキーン』

それを剣モードに変形させたガシャコンブレイカーで受け止めるが勢いは止まらず校舎へと吹き飛ばされてしまう。

「そんなおもちゃでシオンの攻撃止めれると思ってるの？」

何故か浮いている状態でこちらへ煽ってくる。

「シオンのこと倒しに来たんでしょ？ほら早くたおしてみなよ！」

”ガタンツ!”

そんな音を立てながら自分の上にある瓦礫をどける。

「好き放題言いやがって。ちよつと煽っただけじゃん。ガキかよ。」

『高速化』

先程のシオンと自分のことを呼んでいた少女よりもいくらか速い速度で校舎から飛び出し背後へと回る。

「これでも食らってる！お返しだ！」

ガシャコンブレイカーで思い切り後ろから叩きつける。

「キャツ!!」

後ろから思い切り殴ったつもりだったが俺と同じように校舎へとは突っ込まずに空中で止まった。

「何あいつの武器？シオンの周りって攻撃全般のダメージ軽減する障壁あるんだけど。」

「やっぱ、変身しないと火力上がんないな。」

手を握ったり開いたりを繰り返しながらそうつぶやく。

「まあ、なしでどこまで行けるか試すいい機会だ。」

そうしてガシャコンブレイカーをしつかりと握り直しシオンへと走り出す。

「うげ、もう来た。もうちよつと休んでればいいのに。」

手に電気を纏わせながら寛貴に向かって歩き出す。

「どうした、そんな今にも切れそうな顔しちゃって。」

「うるさいーさっさとぶっ飛ばしてやる！」

シオンを煽るとそれに必ず反応をして来るのでとても扱いやすい。寛貴の剣とシオンのパンチがぶつかり合い火花を散らしている。

その時だった。

横から刀による攻撃が飛んできた。

「シオンちゃんもつても楽しそうだな！余も混ぜてくれ余！」

「あんたはさっきのー」

そこに立っていたのは入学式前に会った銀髪の鬼の少女だった。

「あやめちゃん邪魔しないでくれる？こいつはシオンが倒すんだから引っ込んで！」

「それは無理かなー。だって余はシオンちゃんとも戦いたいしその人間様もとても強い感じがするし。」

とてもいい笑顔でとても嬉しそうにあやめと呼ばれた少女が言うとシオンはさらにこめかみに血管が再び浮き上がる。

「はあーあいつの相手はシオンだから邪魔しないでよ！」

「だから無理なの、もうすぐなると思うし」

のんきにそんなことを言うもんだからさっきから怒っているシオンにはそんなことですら逆鱗に触れたのだろう。

「なにが！」

「放送」

上を指をさしながら質問に答える。

『残り人数が一定数より少なくなったので《アンチ》が参加します』
「ってこと！」

あやめの方へと見ると自信満々な顔でドヤ顔をしていた。

ということまで今まで喋りませんでしたけど前回からの今回で一気に減りすぎじゃ…

寛貴くんは言うまでもなくとんでもなくピンチですね。

まあどうにかしないですね。ということでもまた次回！

See you Next Game

バトロワ③

「何喧嘩してるのか知らないけど俺も紫色の子と同意見だ。途中で割り込んでゲームの邪魔すんな。」

手にガシャットを持ち起動させる。

『マイティアクションX』

ゲームエリアが展開され、俺はエグゼイドに変身する。

「行くぜ！」

「えっ、ちよっ!!」

後ろから戸惑うような声が聞こえるが無視をしてガシャコンブレイカーを取り出し、鬼の少女に斬りかかる。

だがその攻撃は簡単に受け止められてしまった。

「人間様にしては力が強いな！」

少女は笑いながら蹴りを入れてくる。

それを何とか受け止めるが勢いを殺しきれずに吹き飛ばされる。

「ぐっ………強い………」

レベル1では勝てないと判断し、すぐにレバーを閉じた。

『レベルアップ！マイティジャンプ！マイティキック！マイティマイティアクションX！』

レベル2になり空中で一回転してから着地する。

「お？まだ強くなるのか？」

少女が興味深そうにこちらを見る。

「ここからが本番だ。」

「ああ……そうだな！楽しませてくれよ！」

お互いに走り出し、武器をぶつけ合う。

そのまま何回か打ち合い、鏝迫り合いになる。

力で押し切ろうと力を込めると少女はニヤツとした表情を浮かべた。

次の瞬間、少女の姿が消え目の前には拳が迫っていた。

「くそっ！」

咄嗟の判断で腕をクロスさせてガードするが吹き飛ばされてしま

い、木に叩きつけられる。

「ガッ!？」

口から血が流れる。

急いで体勢を立て直そうとするが目の前にはすでに少女が立っていた。

そして少女の手刀が振り下ろされる。

「ちよっと待ちなよ」

魔法のバリアに少女の攻撃は防がれていた。

「シオンちゃん、どういうつもり？」

「それはこっちのセリフなんですけどー」

二人の視線の間に火花が見える気がする。

「あやめちゃんが私の獲物に手を出すからでしょ。」

「だからっていきなり横取りはないんじゃない？」

二人は睨み合ったまま動かない。

(どうすればいいんだこれ……。)

そんなことを考えているうちに二人が動き出した。

魔法と剣がぶつかり合い爆発が起きる。爆風を利用して二人とも距離を取った。

「おい！お前ら落ち着け！」

「うるさい黙れ！」

「うるさい余！」

同時に怒鳴られた。理不尽すぎるだろ。

再び戦い始めた二人を見ながら考える。何か方法がないかとポケットに手を入れる。

『カチャッ』

ポケットに入れると何かが手に触れる。

「なんだコレ？」

不思議に思いながらも取り出すとそれは赤を基盤としたガシヤツトだった。

「えつと……ゲキトツロボツツ？」

確かロボツト同士が戦うゲームのはずだ。だけどこんなもの持つ

てなかったはずなのに……。

「とりあえず使ってみるか……」

起動させると待機音が辺りに鳴り響く。

その音でこちらに気づいたのか2人同時にこっちへ振り向く。

「それ、嫌な予感がするから使わせないぞ！」

「なにそれ！」

2人が慌てて止めようとしてくるがもう遅い。ガシヤットを装填すると音声が届く。

『ゲキトツロボツツ！』

『レベルアップ！マイティジャンプ！マイティキック！マイティマイティアクションX！アガツチャ！ぶっ飛ばせ！突撃！ゲキトツパンチ！ゲ・キ・ト・ツロボツツ！』

体が赤く光り、いつもより力が湧いてきた。

「うおおおおお!!」

雄叫びをあげながら飛び上がる。そのまま少女に向かって殴りかかった。

「はあああああ!!」

少女も刀を振り下ろしてくる。二つの攻撃がぶつかる。

その衝撃で地面割れる。

お互いの力に耐え切れず地面にめり込む。

だが負けじとさらに力を込めた。

そして徐々に押し返していく。

「このっ！」

少女が力を込めようとするがそれよりも早く俺は押し切った。

「はああ！」

そのまま少女を吹き飛ばす。

「ぐう……」

少女はうめき声を上げながら地面に倒れ込んだ。

「あやめちゃんやられちゃった？」

いつの間にか俺の後ろに立っていたシオンと呼ばれていた少女が言う。

「ああ、そうだな。次はお前だ！」

ガシャコンブレイカーを構えて少女に向かう。

「やめときなよ。そんな無理してもシオンには勝てないよ」

そう言うとき手を前に突き出してバチバチと雷を出す。

確かにこのまま戦っても勝ち目は薄いだろう。

だけど、ここで引いたら俺は一生後悔する。

「はああー！」

全速力で駆け出し、斬りかかる。

「おっと」

余裕そうな表情を浮かべて避けた。

「甘いよ」

そう呟いた次の瞬間、少女の姿は俺の背後にあった。

背中に強い痛みを感じて吹き飛ばされる。

「ぐはあ……」

地面に転がりながらもすぐに起き上がり、少女の方を見る。

「あれ？そんなにボロボロなのにまだ動けるんだ」

そう言いながらゆっくりと近づいてくる。

少女の手のひらに電気が集まり、大きな球体になる。

「吹っ飛べー！」

少女が手を振った瞬間、雷球が飛んできた。

「くそっ！」

慌てて横に飛ぶ。ギリギリ避けることが出来たが、後ろにあった木

が一瞬で灰になった。

「まじかよ……」

あんなもん食らえばひとたまりもない。

「ほらほら、もっと行くよー！」

再び少女が手をかざすと、今度は無数の雷球が向かって来た。

「くそっ！こうなったらー！」

俺はガシャコンブレイカーにゲキトツロボッツを装填する。

『キメワザー！ゲキトツクリティカルファイニッシュ！』

エネルギーを纏わせたガシャコンブレイカーを勢いよく振り下ろ

す。

斬撃が飛んでいき全ての雷球を撃ち落とすとした。

「嘘でしょ!？」

驚いた顔をしながら後ろに下がる。

「まさかここまでやるなんてね……。しょうがないからシオンの”
とっておき” あげるね。」

すると全身が光に包まれ、光が収まる頃には先程とは比べ物にならない程の雷が体の周りを走っていた。

「これがシオンのとっておきだよ。これでも耐えられるかな?」

少女がこちらに向かって走り出すと同時に姿が消えた。「どこだ
……!」

慌てて周りを見渡すが全く見えない。気配すら感じない。

「こっちだよ!」

背後からの殺気を感じた瞬間、反射的に体を捻っていた。

『ザンツ』

そんな音が聞こえたと思うと右腕に鋭い痛みが走る。「痛つ……」
腕を見ると血が出ていた。

「へえー今のを避けるんだ。すごいじゃん。じゃあもう一回いくよ
!」

少女は再び姿を消す。どうすればいい……考えろ、考えるんだ。

そうして目に入ったのは一つのエネルギーアイテムだった。

「間に合えっ!」

『鋼鉄化!』

何とか拾うことのできたエネルギーアイテムを使い次の攻撃へ備えている間に2つのガシャットをキメワザスロットホルダーとガシャコンブレイカーに差し込む。

『キメワザ!』

アクションロボツクリティカルフィニッシュ!』

音声が鳴ると共に左腕に赤いエフェクトが現れる。

そのまま拳を突き出すと赤いオーラが現れ、それがドリルのように回転しながら進んでいく。

「うおおお!!」

雄叫びをあげながら全力で殴ると、轟音を立てながら一直線に進む。

「うわあああ!!」

悲鳴が聞こえる。そこには腹を抑えて倒れている少女がいた。

「はあ……はあ……」

肩で息をしていると少女が起き上がってきた。

「まだ立つのかよ。」

体力ぎりぎりの状態でもう一度体を向け何とか構えを取る。

「こんな隠しがあるなんて。」

どこか嬉しそうな顔で倒れていった。

《百鬼あやめが脱落しました》

《紫咲シオンが脱落しました》

《ゲキトツロボッツが使用可能になりました》

寛貴くんが制服を送られたのは幻夢コーポレーションでしたからそのときに一緒にポケットに入れていたのかな？それならそれで手紙かなんかを制服と一緒に送ってくればいいのに。まあ、そのおかげでお嬢とシオンちゃんを倒せたのでいいですけど。ということでもう一回！

See you Next Game

バトロワ④

『ガツシユーン』

ベルトから2つのガシヤットを引き抜き変身を解除するとそのまま膝をつく。

「…はあ…はあ…、あと少し」

今まで余り運動をしてこなかったのが仇となったのか今までにないくらいの息切れが凄い。

「とりあえず、どこか隠れる場所へ…」

ガシヤコンブレイカーを杖代わりにして歩き出す。

そして校舎と校舎の間へとたどり着くと壁にもたれかかる。

「あー、しんどい」

空を見上げると雲一つ無い青空が広がっていた。

「ーちよつと休もうかな」

体を休めるために少し目を閉じる。

——その時だった。

少し離れた所で大きな爆発が起こる。その余波の熱風がこちらへと届く。

「少し目を閉じるのも許してくれないのかよ。」

俺は目を開けて爆発が起きた方を見る。そこには黒の少女と白の少女が爆発によって吹き飛ばされていた。

「…あれはミオと傘に入れてくれたフブキって子じゃん。」

そうして爆発を起こしたであらう奴らを見るとそれは自分をH O I O X に勧誘していた少女たちだった。

「ああ、もう…ここで見捨てたら目覚めが悪いじゃんかよ！」

頭をガシガシとかきながら立ち上がると少女達の方へと走り出す。

「うっ………」

私は爆発による衝撃で吹き飛ばされて地面に倒れていた。体を動かそうとするが上手く動かない。どうやら爆風の影響で体のあちこちをひどい怪我をしちやっただみたいらしい。

(これは、ヤバイかも)

そんな事を考えていると自分の体が宙に浮く感覚を覚える。どうやら誰かに持ち上げられたようだ。その人物を確認するため顔を上げるとそこには見知った人物が立っていた。

「一旦、逃げるぞ。」

『ステージセレクト!』

キメワザスロットホルダーについているボタンを押しその場から3人の姿が見えなくなった。

「ラプちゃん。あの子達はもうここにいないの?」

「ああ、そうだな。ベルトの効果か何かでワープしたんだろう。その証拠にこのあたりには何も感じない。」

「ええ〜? 本当なの〜それ〜? ラプラスがショボいだけじゃないの〜?」

「はー? 本当ですー! 怪しいと思うならここら一体攻撃すればわかるんじゃないですか〜?」

「はいはい。ラプ殿も、沙花又もそこまでにしておくでござるよ。」

2人の言い争いを止めたのはいろはだった。彼女とこよりはこの状況であってもとても冷静のままだった。

「今は争っている場合じゃないでござるよ。それにここはラプ殿の力で何とかならないでござるか?」

「まあ、できるけどよお……。でも今から探すととなるとめんどくさいしなあ……」

「そこはほら、頑張るしか無いでござるよ。」

「はいはい。わかりましたよつと。」

そう言うとラプは片手を前に突き出すとそこから紫色のエネルギー波が放たれる。そのエネルギー波は辺り一帯に広がるように広がっていく。しばらくするとその光は収束していき消えていく。そしてそれと同時に空間そのものが揺れ始める。

「これであいつらの場所はわかったからさっさと終わらせるぞ。」

「おお! 流石ラプ殿! 頼りになるでござる!」

「はいはい。なら早く終わらせてくれ。」

そう言つて手をひらひらさせる。それを合図にしたかのようにいろはたちは動き出した。

一方その頃、ミオとフブキは先程までいた場所とは違うところへとワープをしていることに困惑していた。

そうして2人で顔を見合わせていると唐突に地面に降ろされた。(そうだった、持ち上げられてたんだった。)

ミオは自分がどういう状況下を思い出していた。そして、自分たちを運んでくれた人の方を見るといつもよく見る寛貴の姿があった。

「大丈夫か？」

「うん。助けてくれてありがとう。」

「そっちのフブキだっけか？これでこの前の傘のはチャラだな。」

「フフ、おぼえててくれたんだ。」

そう言つて寛貴は手を差し伸べフブキはその手を掴み立ち上がる。

「さてとこれで少しは時間が稼げ…るだ…ろ」

そう口で言うのとフブキを立ち上がらせる勢いで入れ替わるように前のめりで倒れる。

(凄いボロボロになつてる。どれだけ無理したんだろう？いくら後で治るからつて無茶しすぎじゃ？)

寛貴の怪我の多さに驚きながら疑問を覚える。

「ひろきくん?!だいじょうぶ?!」

ミオの慌てようから察するにとても仲が良いのだろう。とても羨ましい限りだ。私にも異性でとても仲の良い友達がいればこんな感じになれたのだろうか？

そこまで考えて頭を思いつきり横にブンブンと振りその考えを消す。

突然頭を振り出したら誰だつてびつくりする。それはミオだつて例外ではないようで目を丸くしてこちらを見ていた。

「どうしたの？急に頭を振ったりして。」

「ううん、なんでもないよ。それより気持ちだけど回復させてあげよう」

誤魔化すように寛貴くんへと手をかざし魔法を使用する。かざした手から光の粉のような物が出て寛貴くんの体へとどんどんあたり暖かな光を出し少しずつ怪我が引いていく。

そうして少ししたあとだった。

突然辺りの空間にひびが入りついにはパリンという音ともに割れてしまった。

「ようやく、入れたでござる。」

そんな声とともに現れたのは肩を少し上下にさせながらも笑顔の風真いろはであった。

「もう、残っているのは風真たちとあなた達だけでござる。降参を進めるでござるよ。」

その顔には風真が負けるわけがないという自身ともう油断はしないという2つの矛盾したなんとも言い難い表情をしていた。

「はい、そうですかって言うと思う?」

「いいえ、だからわざわざここまで来たんでござるよ。」

いろは刀を構えフブキは絶対零度の氷をミオは灼熱の炎を手から出す。

3人は同時に飛び出しぶつかり合う。

フブキとミオの2人の連携の良さに防戦一方になっているいろはだったが思いつきり後ろに吹き飛ばされてしまう。

とてつもない高温の炎と低温の氷が混ざり合うことであたり一面が吹き飛ぶ程の水蒸気爆発が発生する。それにより離れたところにいた寛貴が爆風によって転がされて行ってしまう。

「ひろきくん!」

明らかに致命傷だと思ったのだろう。ミオは戦闘が終わったと思いきろはがいた方から視線を外す。

「隙ありでござる。」

煙からとてつもないスピードで飛びたしてミオのことを斬りつける。

「なんで…きいてないの?」

その呟く声に答えるようにいろはが言う。

「風真のこの服は魔法や自然現象に起こることなどの物理的なダメージ以外の攻撃を軽減するでござる。」

「そんなのずるじゃん！」

そうしてミオが力尽きてその場に倒れる。

《大神ミオが脱落しました》

See you Next Game

バトロワ終幕

「次は、君でござるよ」

刀をこちらへ向けながらじわじわと少しづつ近づいてくる。

「白上のことを見くびり過ぎだよ」

額に流れる汗を拭いながら言うが何も気にしないかのように歩みを更に進めてくる。

「あなたの魔法は風真には効かない。あなたには他の攻撃手段は見当たらない。そんなあなたがどうやって勝つつもりでござるか?」

そのまま少し手を伸ばせば自分のことを触ることができる距離へと来ると立ち止まった。

「覚悟はいいでござるか?」

そうして刀を振り上げる。

「狐が出来るのは魔法だけじゃないんだよ?」

凄いい勢いで立ち上がり眼の前で手を叩く。

「こんなことで風真が怯むとでも!」

しかし、その一瞬で先程までそこにいたはずの狐の子がその場から消えていた。

「いったいどこに?」

辺りを見回すがいくら探しても見つかる気がしない。

すると突然声が聞こえてきた。しかも一つではなく同じ声が幾つも響くように聞こえてくる。

「「こつちだよー!!」」

それは先程まで追い詰めていた相手の声とは思えない程に生き生きとしていた。

「風真を舐めるなー!!!」

辺り一面をすべて斬り刻むように刀を振るう。

「「にゃあ!!」」

姿が見えていないはずなのにところどころ掠りそうになっている。

「流石に脳筋すぎませんか?」

ついでに飛んでくる斬られたコンクリートの残骸が刀の勢いに

よつてとてつもないスピードでぶつかりそうになる。

「アハハ！姿が見えないならここら辺全部壊しちゃえばいいんでござるよー！」

狂ったように笑いながら暴れまわる風真。

それを顔を青くしながら少し離れた所に逃げている白上。

「ありやりや、逆効果だったかあ」

眩いたその時、突然肩に手を置かれる。

「ああ、本当に余計なことをしてくれたな」

白上は首をギギギと聞こえそうなほどゆつくりと後ろへと振り向く。

「あははー、ごめんねー！」

「お前責任取って時間稼いでこい」

その瞬間石のように白上が固まった。

「…嘘ですよ。白上にあれの相手をしろって言うんですか？」

「……」

此方の無言の圧に負けたのか少し涙目になりながら風真の方へと体を向ける。

「いけばいいんでしょ！いけばー!!」

そうして獣人特有の身体能力を活かしてもう一度近づいて行く。

「さてと一撃で決めないとな。」

『マイティアクションX』

『ゲキトツロボッツ』

「大大大変身！」

疲れた体に鞭をうち無理矢理変身をする。

「よーし、さてと次はこれだ！」

近くにあったチョコブロックを破壊してエナジーアイテムを手に入れる。

『マッスル化』

「侍さくん、こつちだよー！」

手を叩きながら挑発をする。

冷静ではなかった風真は何かを考える前に走り出す。

「覚悟するでござるー！」

それを見た白上はニヤリと笑みを浮かべる。

「今だよー！」

寛貴の前まで帰ってくると思いつきりジャンプをして後ろに回る。

「ナイス」

『キメワザ！ゲキトツクリティカルストライク！』

刀を振り回しながら近づいてくる風真に向けて拳を思いっきりぶつける。

『会心の一発！』

「…うっ」

攻撃の当たったところを抑えながらその場へと倒れ込む。

「負けちゃった。ごめんでござる、ラブ殿。」

そう呟きその場から退場していった。

《風真いろはが脱落しました》

《残り二人！》

「ん？まあ、いいか。さてと、あとは俺たちだけだな。」

振り向いた先にいたのは笑顔の白上だった。

「白上は降参します。君がいなかったら絶対負けてましたし。」

《白上フブキが降参しました。》

GAME CLEAR！

See you Next Game

「誰？君？」

「お前たちは俺が切除する」

「会話になってないんですけど？」

『タドルクエスト』

「術式レベル2、変身」

『タドルメグル！タドルメグル！タドルクエスト！』

『ガシャコンソード！』

「これより獣人並びに悪魔の切除手術を開始する。」

「意味わかんないけど！」

突然あらわれ意味不明なことばかり言っている相手に流石に堪忍袋の緒が切れたのか全員で飛びかかる。

「……」

しかし全てを紙一重で避けられ全員がガシャコンソードによって重い反撃喰らってしまう。

『ガ・チーン！』

「なにこれ！あっつ！」

「燃えちやうって！」

「くっつ！」

三者三様の反応を見せ全員に大きなダメージが入っているのは明確だった。

『コ・チーン！』

『キメワザ！タドルクリティカルストライク！』

そんな明らかな隙を逃さずにキメワザを発動させる。
炎によつて苦しんでいるところへと氷がどんとどんと迫り3人は辺
りを纏めて凍らせた。

《ラプラス・ダークネスが脱落しました》

《白衣こよりが脱落しました》

《沙花又クロエが脱落しました》

《 が降参しました》

進み出したDESTINY

「こいつについて黎斗に聞くか」

バトロワが終わり今日の学校での用事もなくなったので会社へと足を運ぶ。

◆□◆
着替えを済ませて幻夢コーポレーションへと向かう。

そして社長室に入ると黎斗がガシヤットを弄っていた。

「何してんだお前？」

「ああ……寛貴くんか……ちよつと待ってくれないか……」

そう言われ幾つかのガシヤットを調整をしているのを眺めて数分たつと調整が終わったのか立ち上がった。

「それで、寛貴くん何の用かな？」

「ああ、これがポケットに入ってたんだけど何か知らないか？」

ゲキトツロボツツのガシヤットを取り出し机の上に置く。

「ああ、それは君に制服を送るときに一緒に入れさせてもらったよ」

「そうか……」

「それで、そのガシヤットは役に立ったかい？」

「まあまあつてところだな」

「それは良かったよ」

俺の言葉を聞いて嬉しかったのか黎斗の顔が綻ぶ。

「でだ、とりあえずこれは返すよ。お前のガシヤットなんだろう。」

「それは私からのプレゼントだ。ありがたく受け取っておくのが正しい選択だと思うな。」

「……じゃあ使わせてもらうよ。ありがとうよ」

「ああ、いつでももまた来るといい。君の頼みなら大抵のことには協力しよう」

「そうさせて貰うわ」

俺は黎斗の部屋を出ていく。

さてと今日はもう寝るか……。

『ピンポーンー』

次の日朝起きて色々準備をしていると突然インターホンが鳴り響く。

そこにはいつも通りの大きな黒い耳が見えていた。

「寛貴くん！起きてるー？」

「起きてるからちよつと待ってくれ」

急いで支度をしてドアを開けると、相変わらず大きな黒い尻尾が見える。

「おはよー！」

「ああ、おはよ。それじゃ行くぞ」

「うんー！」

俺達は二人で歩き始める。

「昨日はなんで先に帰ったの？」

いかにも私怒ってますみたいな感じでこちらへ聞いてくる。

「ごめん、昨日はちよつと用事があったんだ。」

「それってウチと帰るより大事なの？」

上目遣いをしながら聞いてきたので一瞬ドキツとしたがなんとか平静を保つ。

「ああ、大切な用事だったんだよ」

「ふうくん……そうなんだ……」

すると、いきなり俺の手を握ってきてそのまま引つ張るように歩いていく。

「ちよつ！おい！どうしたんだよ！」

「いいじゃん別に」

そんなこんなで少し歩いたところで急に立ち止まる。

「どうした？もうすぐ学校につくぞ。」

後ろから少し覗いて見ると頬が真っ赤になり目がグルグルと回っていた。

「あれ？なんかおかしいな……なんかクラクラする……」

「大丈夫か!？」

俺は慌てて駆け寄ると倒れ込んできたので倒れないように支える。

「ごめーん……少し肩を貸してー……」

「ああ、分かったよ」

そして、ゆつくりと歩いて学校まで向かう。その間ずっと手を繋いだままだったが、お互い顔を見合わせることはなかった。

◆□◆□◆□◆□◆□◆□◆□◆□◆□◆□◆□◆□◆□◆□

「やっと着いたね……」

「そうだな……」

学校に着くなりすぐに保健室へと連れていきベッドに寝かせる。

「あの……寛貴くんありがとうね」

「気にすんなってそれより早く良くなれよ」

「うん……ねえ……一つお願いがあるんだけど……」

「何だ言ってみてくれ」

「頭撫でて欲しいなあなんて思ってた……」

頭を撫でてやると嬉しそうに目を細める。その姿はまるで猫みたいでとても可愛かった。

「なあ、そろそろ教室に行くから。」

「ええ、もうちよつと」

「しようがないな……」

結局授業が始まるギリギリまで頭を撫でていた。

「じゃあな、放課後迎えに来るからそれまで大人しく待ってるよ」

「はい！分かりました！」

俺は保健室の先生に軽く挨拶をしてから自分のクラスへと向かう。

◆□◆□◆□◆□◆□◆□◆□◆□◆□◆□◆□◆□

昼休みになり、屋上で昼食をとっていると突然スマホが震え出した。

「誰からだ？」画面を見ると黎斗からのメッセージが来ていた。

「どうしたんだ？」

「君に会わせたい人がいるんだが今時間あるか？」

「特に予定は無いけど、その人はどんな奴なんだ？」

「私の協力者だよ。是非君にも紹介したくてね」

「なるほど……そういうことか、了解だ。どこに向かえばいいんだ？」

「ああ、この学校の理事長室に行けばいいはずだよ」

「分かった。」

「じゃあまた後で」

言われた通り理事長室へと向かう。

「失礼します」

扉を開けるとそこには黎斗と一人の女性が立っていた。「待ってたよー!」

「あんたが黎斗の協力者か?」

「うん! 私はポッピーピポパポ! よろしくね!」

「俺は宝生寛貴だ。」

「じゃあ早速だけど本題に入ろうか。」

黎斗が話を切り出す。

「まず君には彼女と協力してゲーム病を治療して欲しいんだ。」

「それはどういうことだ?」

「君も一度見ただろう? ゲーム病にかかった人を」

「ああ、まあな。それで俺を仲間にして何をするつもりなんだ?」

「私達はバグスターウイルスを倒すために活動している。そこで君の力を借りたい。」

「つまりお前らはバグスターと戦うって訳だな。」

「その通りだ。だが私達だけでは手が足りない。だから君の力を貸してくれないか?」

「俺はいいけど時には授業中にも起きるんじゃないのか? そこんところ先生はどうなんだ。」

「その辺のことは心配しないでくれ、私に任せてくれれば問題はない。」

それまで椅子に座り何も言わなかった先生がそう言う。

「わかった。とりあえず協力させてもらう」

「ありがとう、助かるよ」

こうして俺達は共に戦うことになった。

放課後ミオを迎えに行く朝いた保健室先生とは違う男の人が椅子に座っていた。

「何のようだ。」

「同級生の大神ミオさんを迎えに来ました。」

「そうか、そこで寝ているから連れて行け」

顔を一切こちらへと向けずに淡々とそう言い放つ。

「……はい。ミオ起きろ。帰るぞ。」

いくら揺すつても起きないミオを背負うと保健室をあとにする。

「失礼しました」

最後にそう言って部屋から出るがそれでもこちらを一切見なかった。

See you Next Game

二度目の Rescue

「体調は良くなったか？」

「…ん、ちよつとだけ」

背負っているミオに尋ねると少し力の抜けたような声の返事が返ってきた。

「そうか。じゃあ家帰ったら寝てろよ。」

「は、はい、分かった」

分かっているのか分かってないのかよくわからない生返事をされ少し不安になるがまあミオのことだ。体調が悪い時には無理して動きはしないだろう。

「じゃあ、安静にしてろよ。何かあったら呼んでくれていいから」

「ふふっ。優しいね、寛貴くんは。」

目が開いているのかわからない状態でこちらへ笑いかけてくるがなんのこともか一切わからないけど…

「何いってんだ。さっさと寝ろ。」

目に手を被せて何も見えないようにさせる。

「ごめんなさ〜い。」

少し嬉しそうな声で謝るとそれ以降は寝息しか聞こえなくなった。

ミオを寝かして自分の部屋へと戻ると何故かポッピーピポパポが椅子に座ってお菓子を食べていた。

「…何してんの？ていうかどうやって入ったんだ？」

「どうやって言われても普通に入ったよ。鍵開いてたし。」

(いつも、ほとんど閉めてないから気づかなかった。次からは閉めていかないよ)

「まあ、私バグスターだから鍵開いても閉まってもあんまり関係無いけどねー！」

「ふざけんな！俺のプライバシーは?!」

「まあまあそう怒らないで。今日はプレゼント持ってきたんだよ。はいこれ、どうぞー！」

そうして手渡しして来たのは白衣と聴診器(?)のようなものだった。「白衣はゲーム病治すんだからお医者さんばいほうがいいでしょ?それとそのスコープはゲーム病の人が出たとき緊急通報が入ると教えてくれるどんな種類か教えてくれるの。」

そんな説明をしている間に白衣へと手を通す。驚いたことにサイズはピッタリのようなのだ。

「…ピッタリなんだけど。いつ測ったんだ?」

「いま制服来てるでしょ。それ作ったのと白衣作ったのは両方社長だよ。だからピッタリなの!すごいよね!」

そんな衝撃の事を暴露され驚いていると手に持っているスコープから音が鳴り響く。

「うわあ!」

「緊急通報が来たよ!行くよ!」

そう言うのとスタスタと玄関へと歩いていく。

「ああ、もう〜!ちよつと待っててください!」

スマホを少し操作してから後ろをついていく。

『ごめん、少し出かけるから。ちよつと待っててくれ。』

「ここだね!」

乗っていたバイクから降り少し早歩きで移動していく。その後ろに座っていた俺も急いでついていく。

「お前たちか?!トワ様を助けてくれるのは!」

「そうだよ!だからちよつと下がってね。」

テキパキと手際よくどんだんやっていくもんだから後ろから眺めていると声をかけられた。

「何してるの?!早くスコープで確認して!」

「…はっ!はい。」

スコープで確認するとこの前倒したはずのソルティに再び感染していた。

「君何か嫌なことあったのか?」

そこで初めて目の前で横になっている少女、トワに話しかける。

「そんなわけ……ていうかまた君に迷惑掛けちゃうね。」

「そうだな、だから少し楽にしてて。」

あんまり喋らせるのもよくなさそうだから無理矢理会話を切り上げガシヤットを構える。

『マイティアクションX』

ゲームエリアが展開されトワの体から直接ソルティイが現れる。

「また、貴様か！私はレベルアップしたのだ。以前のようによくと思うなよ！」

ソルティイは余裕で勝てると思ってるのか杖をこちらへと向けながら高笑いをしている。

「そんな大口叩いたんだから楽しませてくれよ。大変身！」

『ガチャーン！レベルアップ！マイティジャンプ！マイティキック！マイティアクションX！』

「お前らは下がってろよ」

横にいたポツピーとラプラスにそう言いうとソルティイへと突っ込んでいく。

ガシヤコンブレイカーを片手に持ち思いっきり叩きつけようと振るが以前よりも速いスピードで移動し避けてくる。

「以前の私と思うなよ。レベルアップして今の私は云わばレベル3だ！」

そう言いながら杖をこちらに向け電撃を放ってくる。

「そうかよ！けどな、生憎お前にいつまでも構ってられないんだ。さっさと終わらせてもらうぜ。」

近くにあつたブロックを壊しアイテムを手に入れる。

『高速化！』

「な、速い！」

ソルティイの周りを分身が出来るほどの速さで回り惑わす。

「……この私の目を回すとは……」

声は威勢がいいがその姿を見ると目が回ってまともに歩けないのは一目瞭然だった。

「フィニッシュは必殺技で決まりだ！」

ガシヤットをキメワザスロットホルダーへと差し込む。

『ガツシューーン』

『ガシヤット！キメワザ！マイテイクリティカルストライク！』

「この私がまた負けるとは！くっそー！」

『会心の一発！』

GAME CLEAR！

「よいしょっと。おーい、大丈夫か？」

「うん、大丈夫。また助けられちゃった、ありがとね。それにしても君強いね。」

二人で話していると後ろからポッピーとラプラスがやってくる。

「トワさまー！大丈夫ですか?!」

目に涙を浮かべながらトワに飛びつくラプラスだったが、困ったような顔をしながら体をずらされトワに避けられてしまう。

「大丈夫だけど、それされたら大丈夫じゃなくなるかな。」

「…は〜い」

「寛貴くんはゲームとっても上手なんだね。すごい！」

「ありがとうございます。とりあえず話は後で聞きますから。」

無理矢理ポッピーを後にしてトワの元に近づく。

「調子はどうだ？何処が悪いところはないか？」

「特にないよ！ほら元気元気！」

トワは笑顔で腕に力こぶを作るように何度も曲げて元気をアピールするように何度も繰り返す。

「…大丈夫だから。」

「分かった。けど折角連絡先交換してるんだから何か悩んでるなら相談してくれ。助けになるから」

「——うん、わかった！ほんとに困ったら連絡するわ！」

「あ、そうだ！ゲーム病つてストレスで進行するからなるべくストレス感じないように生活してね〜！」

ポッピーが突然肩の上からそんなことを言い出す。

「じゃあ、またな。ポッピーも帰るぞー！」

そう言うのと襟をつかんでその場から離れていく。

S
e
e

y
o
u

N
e
x
t

G
a
m
e

突然の Visitor

トワのゲーム病を治し家に帰るときに一度ミオの部屋へと寄ったが特に異常はなく熱は下がりきっていた。

「じゃあ、後はゆっくり寝てたら治ると思うから」

「うん、ありがとう。寛貴くんも体調崩さないように早く寝るんだよ」
「……ああ、またな。」

そうして部屋へ帰り寝ようとしたがそこには派手な格好をした人物が立っていた。

「私はどうすればいいかな!」

「ええー、元居た場所に帰りなよ」

「でも居た場所って言っても黎斗のこのゲーム機だけど流石にこの時間は電源ついてないよ?」

そのまま「どうしよー!」と言い部屋中を移動しまくる。何故か移動している動作は見えないが。(?)とりあえず黎斗にどうすればいいか聞いてみようかと携帯を起動する。

「なあ、黎斗。ポップピーピポパポはどうすればいい?」

黎斗に電話をかけるが電話に出た黎斗はとんでもないことを口走る。

「そういえばそうだったね。:明日ポップピーにゲーム機を移動させるように言っておくから今日は泊めてあげてくれ」

「はあーちよつと待てよーおい!」

黎斗が言い終わると一方的に電話を切りこちらの意見は無視をされた。

「黎斗はなんて言ってた?」

「今日は泊めてって。ああ、あと明日ちよつとこつちに来いって」

そう言っているとポップピーは一安心したかのようにふうと息を吐き出す。

「よかったー!追い出されるかと思った!」

「まあ、そういうわけだからそのベッドとか好きなどで寝てくれ。」

「やった!——あれ寛貴はどうするの?」

喜んだかと思いきや一瞬で違うことを考え聞いてくる。

「今日はゲームするから寝ない。だから好きにしててくれ」

そう言うのとパソコンの前にある椅子に座りヘッドホンを付けパソコンを起動する。

「というわけでおやすみ」

そうして無理矢理会話を切り上げゲームを開始する。

「!!もう、無理しないでね!おやすみ!」

何故か怒っているポッピーを横目に次々とコントローラーを操作しコマンドを打ち込んでいく。

そうしてゲームをして数時間が経過し朝日が登り窓から日差しが差し込んでくる。

「もう、朝か。」

数分前までやっていたゲームの電源を落とし学校の準備を進めていく。

「ご飯はこれでいいか」

取り出したのは10秒で食べれるのが売りのゼリー飲料。一睡もせずに次の日の朝ご飯がゼリーとはもしミオに見つかったら説教が始まるだろう。……そう、見つかれば次第すぐに。

「何がいいのかな?」

後ろから聞こえてきた声に首がギギギと鳴りそうなくらいゆっくり回すとそこにはいつもの見慣れた耳を持つ少女が立っていた。

「……体調は良くなったのか?」

「うん。おかげさまでね。それで何がいいのかな?寛貴くん」

目に光のない状態そんなことを言うほな怖いのでやめてほしいのだが。とりあえずこういう時は逃げるが勝ちだ。

ということまでカバンを手にとり学校へと出発した。

「あ!ちよつと!」

「先に行ってるから!」

「待ちなさい!」

先に家を出た寛貴を追いかけるようにミオも家から出る。

「仲が良いなー！私も用事を済ませとこつと！」
それを眺めていたポツピーピポパポは部屋からいなくなった。

「ひーろーきーくーん？どうしてあんなもので朝ごはん済ませようとしたのかな？」

こちらに迫ってくる顔は笑顔だが目は一切笑っていない。それが余計怖く感じさせる理由だろうか？

「いや、ちよつと。昨日大変そうだったから迷惑をかけるのはなつて。」

「ふくん。それが理由ね？」

「ごめつ——」

謝ろうと顔を向けると頬を思いっきりつねられる。

「すみませーん！」

「次はないからね」

そうして頬を離してくれた。

「あーすみませーん！」

横から話しかけられたことに驚きすぐにミオが体を離す。

「ー！いつからそこにいたの?!」

「あー頬を引つ張つてたときくらいからかな」

「そんなときからっ！」

顔を赤くして体が固まってしまったミオは置いていって訪ねてきた子に何の用か聞いてみる。

「あーそれで君は何のようがあつたんだ？」

「君がバトロワー位だった寛貴さんだね。そんな君に頼みがあつてきたんだ。」

「……頼みって？」

「僕の友達の常闇トワを助けるのを手伝って欲しいんだよ。」

……世間って狭いなあ

「あの子がどうかしたのか？というかあんたは天使だろ？悪魔と天使が仲良くするなんて聞いたことないんだが。」

「それは……とにかく僕はトワを助けたいんだ。手伝ってよ！」

「やだね。トワから頼まれるならともかくだが。それに俺はあんたのことを全く知らないし。」

「とりあえずあんたがどういう人なのか教えてくれないと困るんだけど」

そう言うのと頭に手裏剣のようなものをつけた少女は黙り込んでしまった。ちよつと言い過ぎたかな？そんなことを考えていると小さいことで話し始めた。

「僕はトワの——」

See you Next Game